

【第1部】

**神戸消防グランドデザイン2025
(神戸市消防基本計画)**

(素案)

2010.11

神戸消防グランドデザイン2025

(神戸市消防基本計画：15ヵ年計画)

はじめに

目次

1 第1章 計画の基本的な考え方

- (1) 計画策定趣旨…………… 1
- (2) 計画の構成・位置付け…………… 1
- (3) 計画期間…………… 3
- (4) 計画の見直し…………… 3
- コラム1** 神戸市基本計画…………… 5

2 第2章 2025年神戸を取り巻く社会潮流と課題

- (1) 人口減少・超高齢化社会の到来…………… 6
- (2) 災害の多様化…………… 8
- (3) 高齢化などを背景とした救急需要の増加と高度化……………11
- (4) 阪神・淡路大震災から30年後の社会に向けて……………13
- (5) 「港都こうべ」の守り……………15
- コラム2** 神戸消防の歩み……………17

3 第3章 「グランドデザイン」

- (1) 安全・安心都市“こうべ”の実現に向けて……………18
- コラム3** デザインとは……………19
- (2) グランドデザイン全体図……………20
- (3) 3つの「基本方針」……………22
- (4) 5つの「神戸のまちの将来像」……………26
- (5) 2つの「共通取組方針」……………29

4 第4章 具体的取組施策「消防アクションプラン」

- (1) 具体的取組施策……………31
- (2) 消防アクションプラン2011－2015（前期）……………32
- (3) 消防アクションプラン（中期・後期）……………32
- (4) 計画実現に向けて……………33
- (5) 未来に繋がる、未来へ繋げる……………33

5 資料

- (1) 消防基本計画策定経過……………34
- (2) 消防基本計画検討会名簿……………35
- (3) 【参考】消防基本計画検討会設置要綱……………36

第1章 計画の基本的な考え方

消防局では、2006年2月に「2010消防基本計画」を策定し、この計画に基づき、市民や事業者と共に、安全への取り組みを進めてきました。

この章では、今回新しく策定する消防基本計画の策定趣旨や、構成、計画期間など、計画の基本的な考え方について明らかにします。

1 計画策定趣旨

消防局では、1995年の阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、10ヵ年計画として「神戸市消防基本計画」を策定しました。（計画年次1996～2005年）

“安全”は都市に課せられた最も基本的な条件であることから、「安心して暮らし、働けるまち」の実現を目指して、震災を教訓とした消防防災体制の充実、強化に取り組んできました。

2006年からは「“いのち”を守る」という目標を、消防、市民、事業者との“協働と参画”により取り組んでいくことを盛り込んだ「神戸2010消防基本計画」を策定しました。（計画年次2006～2010年）

この計画では、市が2010年に目指す将来像として「ともにつくる、安全で安心なまち“こうべ”」を掲げ、市民の皆さんや学校、事業所の方々などと行政が、一体となって取り組みを進めてきたところです。

震災から15年が経過し、3分の1を超える市民が震災を経験していないといわれています。

神戸の安全・安心への取り組みについて、これからもこの震災の教訓を風化させることのないよう、引き続き自助・共助・公助での取り組みを継承していくとともに、これらの取り組みが防災福祉コミュニティなど「神戸らしさ」となって引き継がれていくことで、災害に対して備える“人財づくり”に繋がるものと考えます。

また、人口減少・超高齢化社会の到来が目前に迫り、科学技術の発達や地球温暖化に伴うゲリラ豪雨の発生など災害現象が複雑・多様化し、その予測が困難になると考えられ、消防ニーズはますます高まるものと思われれます。

本計画を策定する上で、上記のような背景を視野に、神戸に住み、働き、そして訪れるすべての人々が、安全で安心できるような仕組みづくりを積極的に行い、神戸の将来像を描いていきます。

2 計画の構成・位置付け

神戸市消防基本計画は、2025年（平成37年）までの中長期的な取り組みの方向性を示す「神戸消防グランドデザイン2025」（第1部）と、2015年度までの主な具体的施策・事務事業をまとめた「消防アクションプラン2011～2015」（第2部）の2部構成で策定します。

【第1部】**神戸消防グランドデザイン2025**※15ヶ年計画

市において、今後考えられる消防に関する主な課題を整理した上で、2025年に向けた市のあるべき将来像と、消防局が取り組むべき施策の方向性を示します。

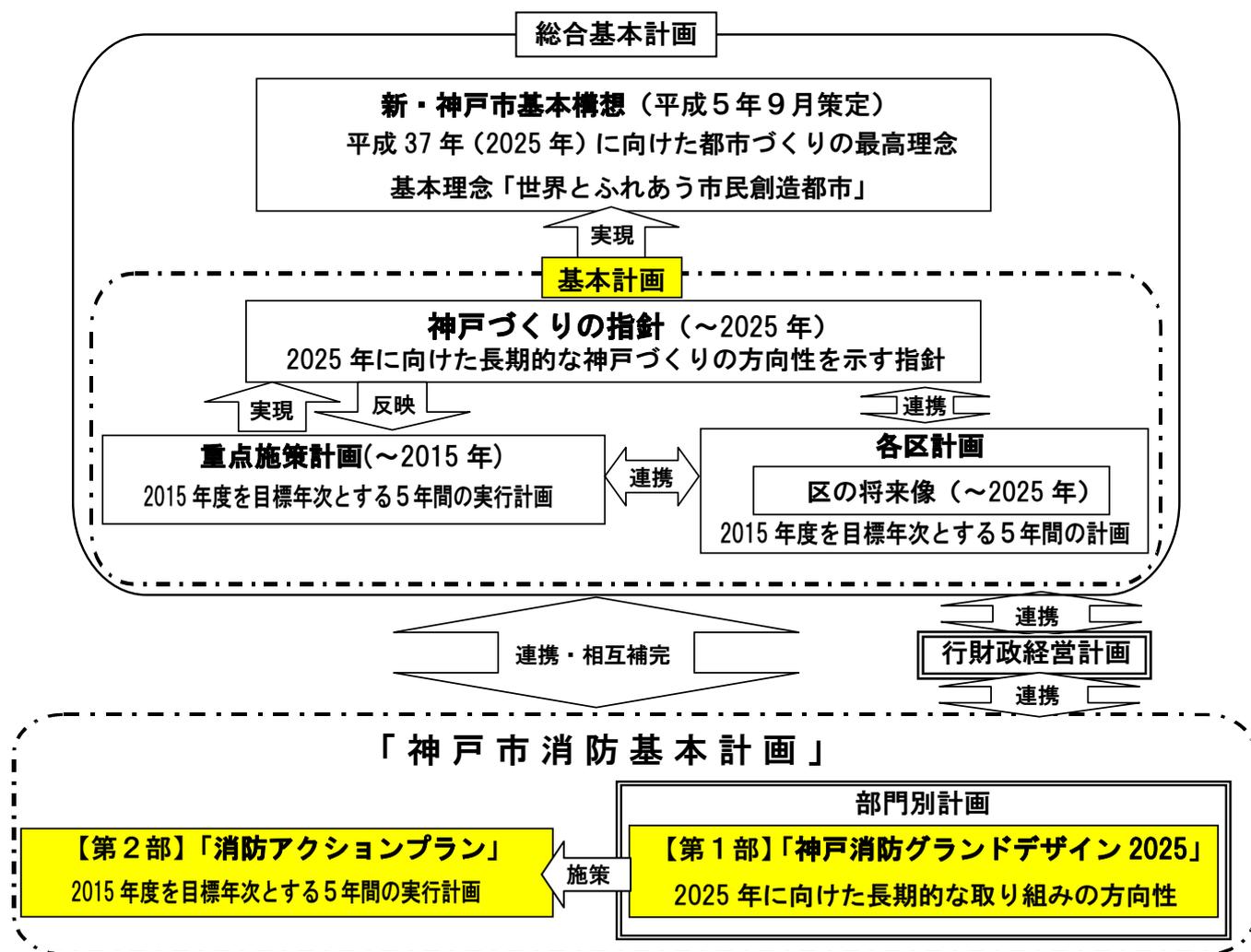
【第2部】**消防アクションプラン2011～2015**※5ヶ年計画

アクションプランでは、上記取り組み指針での方向性を受け、5年間の具体的な取り組み施策を計画していきます。

また、今まで取り組んできた「神戸 2010 消防基本計画」や「消防体制の再構築」、「東灘工場火災（消防職員殉職事案）での事故調査委員会答申」について、実施してきた具体的施策等を整理した上アクションプランに反映させるとともに、PDCAサイクルによる具体的施策の見直しを行う“仕組み”についても構築していきます。

これら2つの計画は、市の最高理念である「新・神戸市基本構想」の目標年次である2025年（平成37年）に向けた、長期的な神戸づくりの方向性を示す指針である「神戸づくりの指針」及び2015年（平成27年）度を目標年次とする実行計画である「重点施策計画」と相互に補完・連携を図る関係にあり、消防に関する施策における部門別計画として位置付けます。（図1）

図1 【神戸市総合基本計画と消防基本計画との関係】



※上記の2つ【第1部・第2部】を合わせたものを「神戸市消防基本計画」と呼ぶ

3 計画期間

【第1部】神戸消防グランドデザイン2025

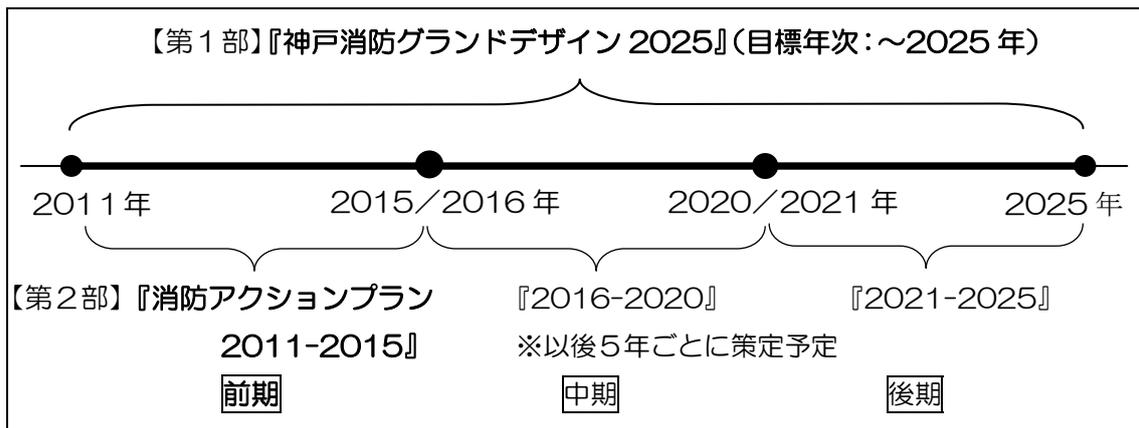
「神戸づくりの指針」と同じく、2025年（平成37年）を目標年次とします。
なお、この指針は、災害の発生状況及び消防行政等の動向を見据えながら必要に応じて見直しを行っていく予定です。（第1章4「計画の見直し」参照）

【第2部】消防アクションプラン（前期・中期・後期）

「神戸市基本計画重点施策計画」と同じ2015年（平成27年）を目標年次とすべく、当初は上記取り組み指針の目標年次2025年（平成37年）の15カ年間のうち、前期5カ年間にあたる2011年（平成23年）度～2015年（平成27年）度を計画年次として策定します。

その後、中期計画（～2020年度）・後期計画（～2025年度）を5年ごとに策定し（図2）、5年間での取り組みについてPDCAサイクルによる検証・評価及び具体的施策等の見直しを次期計画に反映していきます。

図2【それぞれの計画目標年次】



4 計画の見直し

今回策定する「神戸消防グランドデザイン2025」については、神戸を取り巻く社会潮流や災害傾向などを参考に、2025年に向けての神戸の安全で安心なまちの将来像を描いています。

ここでは、今後15年間で取り組むべき方向性を示していますが、急激な社会変化や予期せぬ災害の発生など、計画を進めていく上で見直さなくてはならない事象が発生した場合などには、これらに柔軟に対応していけるよう計画を見直していきます。

神戸消防グランドデザイン2025（5年ごとの見直し）

本計画は、後述する「基本理念」、「3つの基本方針」、「5つの安全で安心なまちの将来像」、そして「2つの共通取組方針」により構成され、その取り組みの方向性を明

らかにしています。

このうち、「5つのまちの将来像」の重点施策と「2つの共通取組方針」については、概ねアクションプラン改正の5年ごとに、その時々の特トピックスや時流、検証結果等を受けて設定、変更できることとします。また、変更した場合には消防アクションプラン（5年計画）へその内容を反映させていきます。（引き続き継続して取り組む場合には、変更はしない）

ランドデザインのうち、「基本理念」、「3つの基本方針」、「5つの安全で安心なまちの将来像」については、15年後の安全・安心なまちの実現のため継続して推進していきますが、社会情勢等の変化によってはランドデザインごと見直しを行います。

消防アクションプラン（5年ごとの見直し）

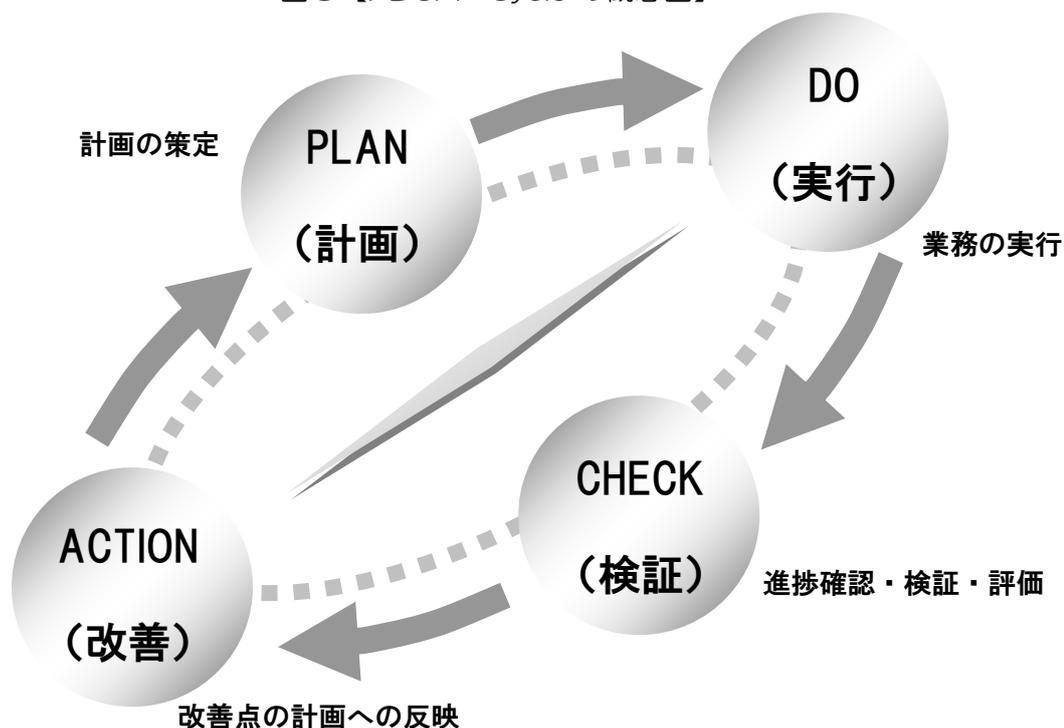
消防アクションプランについては5年ごとに見直しを行い、新たな具体的事業について盛り込んでいきます。

アクションプランは①前期（2011－2015年度）、②中期（2016－2020年度）、③後期（2021－2025年度）とそれぞれ策定し、2025年度には計画目標年次として、長期計画である「神戸消防ランドデザイン2025」と合わせた次期消防基本計画の策定を行うこととなります。

年度ごとの見直し

また、消防アクションプランに盛り込まれる各具体的施策・事業については、年度ごとにPDCAサイクルによる進捗確認を行うとともに、「まちの将来像」ごとに検証・評価を行い、次年度に向けた改善を行って行きます。（図3）

図3【PDCA Cycleの概念図】



第2章 2025年神戸市を取り巻く社会潮流

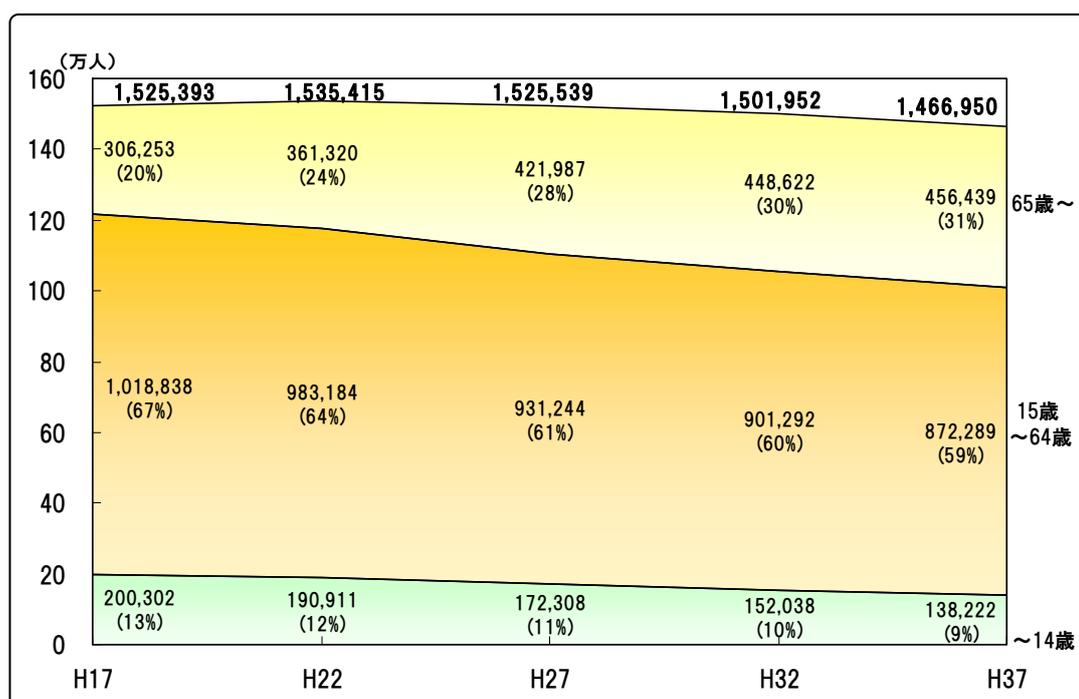
時代とともに、街は様々な要因によってその表情を変えていきます。この章では、計画をつくる上での前提として、2025年の神戸市がどのような社会潮流の中にあるのか、5つの視点から概観し、安全で安心な神戸市の将来像を想像していきます。

1 人口減少・超高齢化社会の到来

現在の状況と今後の予測

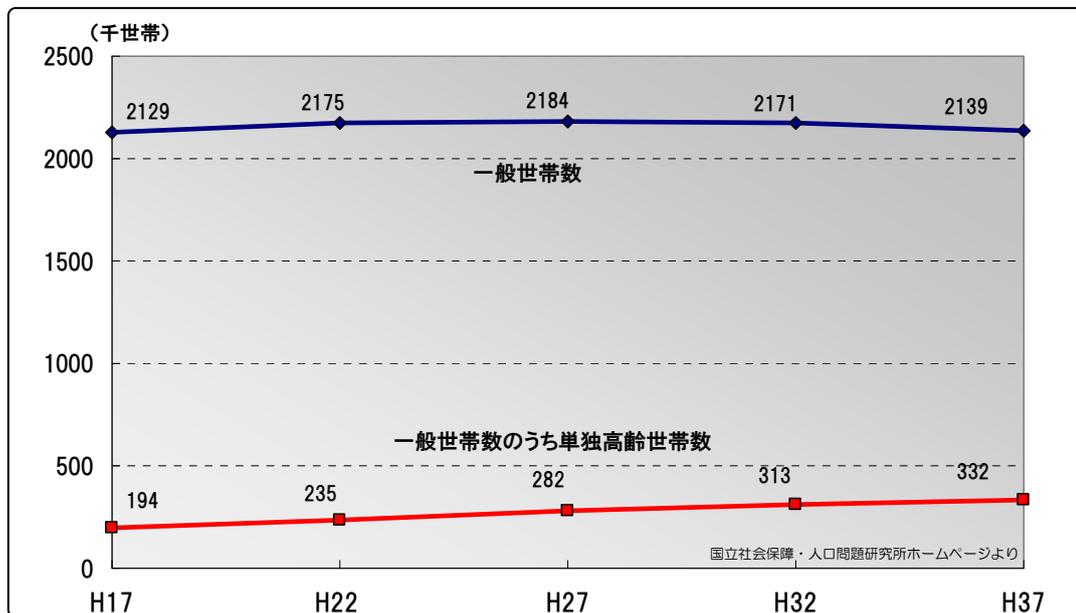
全国的な傾向と同様に、神戸市においても少子・超高齢化が進んでいます。既に人口の自然減少が始まっており、市全体の推計人口も将来的には減少することが予測されています（図4）。年齢構成も大きく変化し、生産年齢人口（15歳から64歳まで）が減少する一方で、65歳以上の老年人口が増加することが予想されています。人口動態は各区・各地域によって様々であり、一律ではありませんが、世帯人員の縮小や共働き世帯の増加等の家族機能の変容も進んでおり、将来的にもこの傾向が続くものと考えられます。（図5・6）

図4 【神戸市人口の将来予測】：全体の人口は減少するが、65歳の人口は増加していく



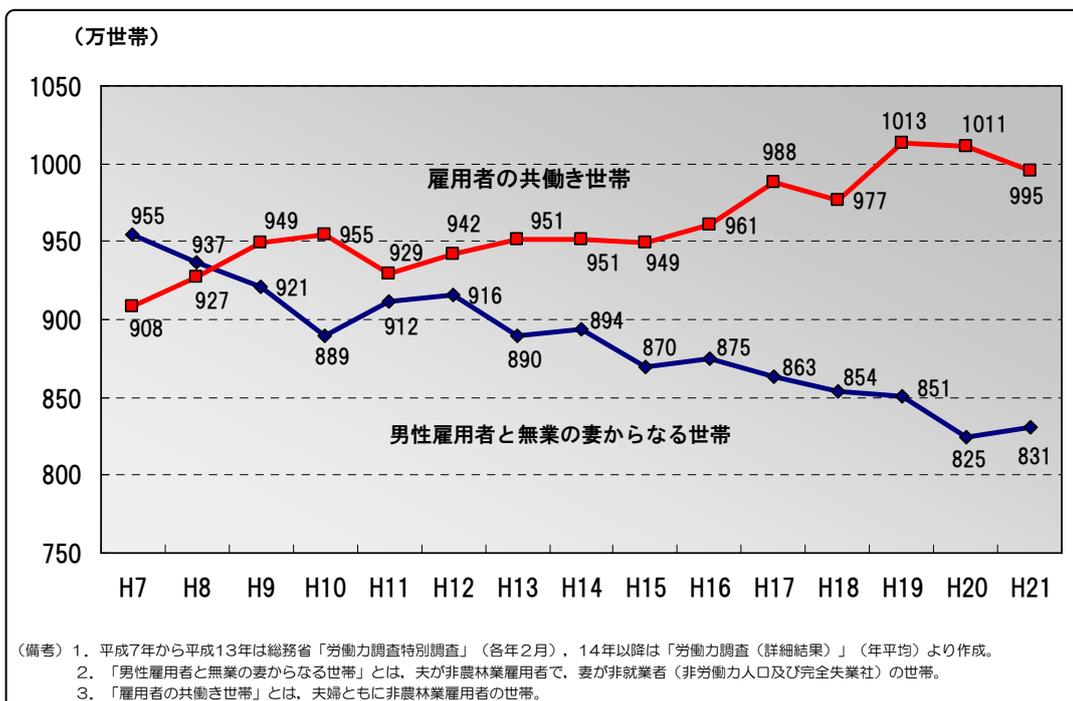
国立社会保障・人口問題研究所ホームページより

図5【世帯数の将来予測（兵庫県）】：一般世帯数は横ばいだが、単独高齢世帯は増加する



国立社会保障・人口問題研究所 HP より作成

図6【共働き等世帯数の推移（全国）】：共働き世帯は増加し、若い世代の世帯が屋間地域にいないことが懸念される



(備考) 1. 平成7年から平成13年は総務省「労働力調査特別調査」(各年2月)、14年以降は「労働力調査(詳細結果)」(年平均)より作成。
 2. 「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」とは、夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者(非労働力人口及び完全失業社)の世帯。
 3. 「雇用の共働き世帯」とは、夫婦ともに非農林業雇用者の世帯。

2025年に向けた課題

これにより、災害時に単独世帯の高齢者等が孤立してしまうおそれや、住宅火災での死者の増加、救急需要の増加が考えられます。

地域の中で、一人ひとりが共に助け合い、個人、家庭、地域、事業所が皆で防災に携わるまちを目指していかなければなりません。

2 災害の多様化

現在の状況

近年、様々な自然的・人為的要因によって災害が多様化し、ますます消防活動が困難になる傾向にあります。また、阪神・淡路大震災以降、消防隊の火災への出動件数はほぼ横ばいとなっていますが、単身高齢者の室内閉じ込め事案や、危険物事故への出動は徐々に増加してきており、平成21年の全体の出動件数は震災前と比べて約2倍となるなど、消防需要は高まっていると言えます。さらに今後も、地球温暖化と密接な関係があると考えられている局地的集中豪雨や、新型インフルエンザに代表される新興感染症等、新たなる自然災害への対応が求められるほか、テロ災害や複雑・高層化し続ける建物構造等、人為的要因による災害の多様化にも対応していかなければなりません。（図7・8）



JR 福知山線脱線事故



硫化水素による自殺事案



地下鉄サリン事件

○様々な要因による災害の多様化

これまでには想像できなかったような様々な要因が、近年の災害の多様化の引き金となってきています。

【自然的要因】

- ・地球温暖化 … 局地的集中豪雨等による水害・竜巻の発生
- ・新興感染症 … 未知の疾病の発生

【人的・物的要因】

- ・複雑な店舗形態 … 個室型遊興店舗火災・雑居ビル火災
- ・テロ災害の危険性 … NBC テロ・爆破テロの発生
- ・社会不安を背景とした自殺者の増加 … 硫化水素・入水・薬物等、様々な自殺企図
- ・単身高齢世帯の増加 … 室内での急病による入口破壊進入など、救助事案の増加
- ・多様な化学物質の漏洩 … 施設や船舶等からの漏洩
- ・都市型水害 … 建物構造の深層化・複雑化による被害の拡大
- ・新素材の開発による火災危険要因の拡大 … 内装材・断熱材等

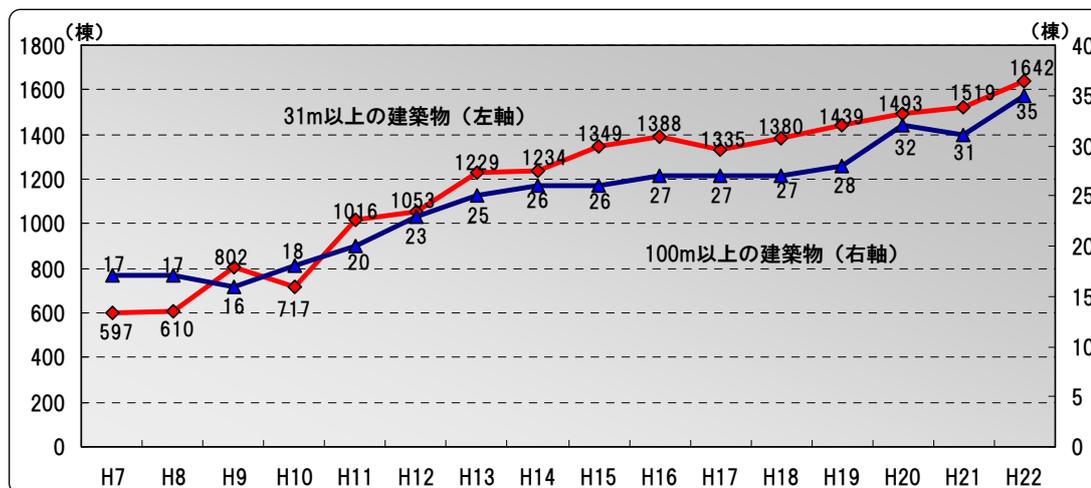
○1995-2010に発生した様々な災害等

1995年からの15年間に、阪神・淡路大震災を始めとした、様々な災害が国内外で発生し、多くの尊い人命が奪われました。

自然的要因	
地震	<ul style="list-style-type: none"> ・ 阪神・淡路大震災 死者6,434名 ・ トルコ西部地震 死者15,800名以上 国際消防救助隊として職員4名派遣 ・ スマトラ沖地震 死者・不明者22万名以上 ・ 中国・四川省大地震 死者・不明者8万名以上
水害	<ul style="list-style-type: none"> ・ 神戸市 新湊川水害 ・ 台風の近畿地方への上陸が相次ぐ(16号8月, 18号・21号9月, 23号10月) ・ 福井豪雨発生 緊急消防援助隊として初出動 ・ 都賀川水難事故 死者5名 ・ 東京都豊島区下水道事故 死者5名
新興感染症	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中国で重症呼吸器症候群(SARS)の流行・各国への拡大 ・ 京都府等で養鶏等への高病原性鳥インフルエンザ感染を確認 ・ 神戸市で国内初の新型インフルエンザ感染者確認 ・ 宮崎県での口蹄疫の流行
人的・物的要因	
火災	<p>(法令改正のきっかけとなった国内の火災)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 群馬県化学工場爆発火災 <ul style="list-style-type: none"> →消防法改正(ヒドロキシルアミン等の危険物物品への追加) ・ 新宿歌舞伎町雑居ビル火災 死者44名 負傷者3名 <ul style="list-style-type: none"> →消防法改正(違反是正の徹底・防火管理の徹底等) ・ 十勝沖地震に伴う製油所タンク火災 広域応援により出動 <ul style="list-style-type: none"> →石油コンビナート等災害防止法施行令等の一部改正(防災規程の変更命令等) ・ 長崎県の認知症高齢者グループホーム火災 死者7名 <ul style="list-style-type: none"> →消防法施行令改正(福祉施設の消防設備設置基準の強化等) ・ 宝塚カラオケボックス火災 死者3名 <ul style="list-style-type: none"> →消防法施行令改正(個室を設けた遊興施設への自動火災報知設備の設置基準強化) <p>(国外における死者100名以上の大規模火災)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オーストリアでケーブルカー火災 死者155名 ・ 韓国テグ市で地下鉄列車火災 死者192名 ・ オーストラリアのビクトリア州で森林火災 死者173名
テロ災害	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京地下鉄サリン事件 死者13名・負傷者約6,300名 ・ アメリカ同時多発テロ事件 死者・不明者5,500名以上 ・ ロンドン同時爆破事件 死者56名
化学物質関係事故	<ul style="list-style-type: none"> ・ ナホトカ号重油流出事故 ・ 茨城県東海村の核燃料施設JCOで臨界事故 死者2名 ・ 平成20年ごろ 硫化水素による自殺者が急増 ・ アメリカ原油流出事故 ・ ハンガリー アルミニウム赤泥流出事故
その他の事件・事故	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大教大付属池田小学校児童殺傷事件 死者8名 ・ 明石花火大会歩道橋事故 死者11名 負傷者247名 ・ JR福知山線列車脱線事故 死者107名 負傷者549名 県内応援として出動 ・ チリ サンホセ鉱山落盤事故

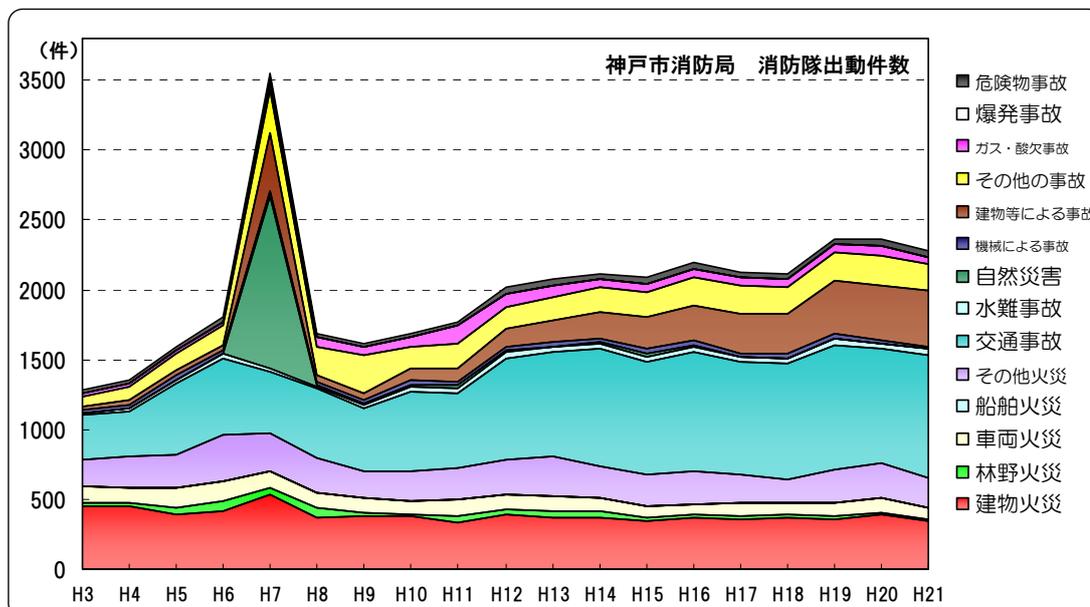
(備考) 1. 主な災害要因ごとに、社会的影響の大きかった国内外の災害や、神戸市内における災害等を記載
2. 被害情報は総務省消防庁・内閣府・アジア防災センターHP等より

図7【神戸市内における高層建築物の推移】：高層建築物は増加の一途をたどっている



神戸市消防局統計書より作成

図8【出動件数から見る災害の多様化】：交通事故・建物等による事故への出動が増加している



神戸市消防局統計書より作成

2025年に向けた課題

今後も、災害はますます多様化・複雑化すると考えられます。職員ひとり一人の能力を向上させるための訓練・研修、時流に合致した部隊配置等により、様々な災害に対応できる消防体制を構築することや、高層化・深層化する建物からの高齢者や要援護者の避難についての配慮も求められます。

また、レスキューロボットやICTに代表される高度な技術などを、より効率的で安全な消防活動のために取り入れたり、専門知識や技術を有する企業・大学や他機関と緊密に連携したりすること、あるいは、今世紀前半にも発生する可能性が高いとされる東南海・南海地震や、テロなどの大規模な災害等に備え、他の消防本部等との広域的な連携体制を強化しておくことが、これまでも増して重要となります。

3 高齢化などを背景とした救急需要の増加と高度化

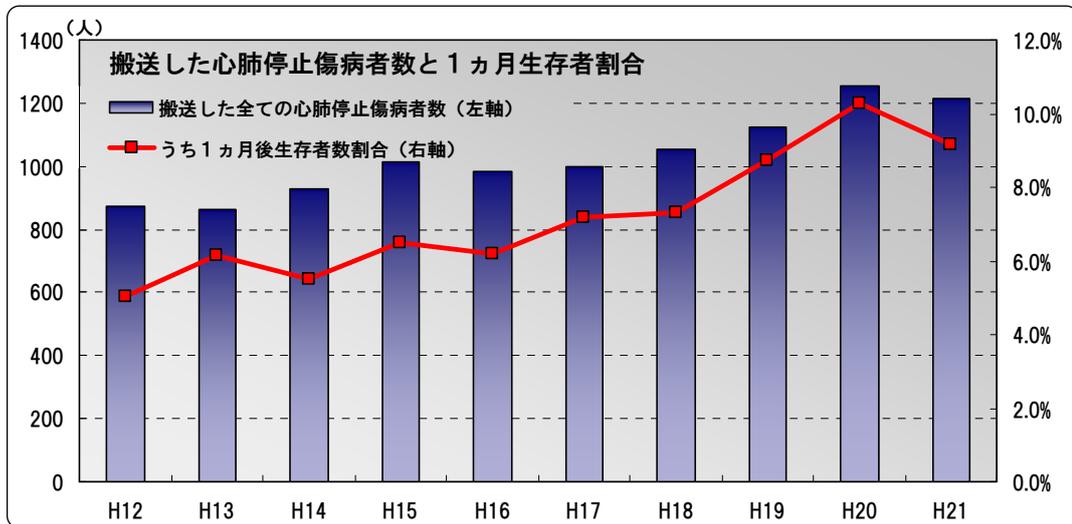
現在の状況

近年増加の一途をたどった救急出動件数は、救急車適正利用の広報などによって一旦減少したものの、平成 21 年度は再度増加に転じています。また、救急処置内容の高度化や、救急車の走行距離の増加などにより、一件当たりの救急出動の総所要時間（出動～帰庁）は増加傾向にあります。このようなことから、平成 21 年中の救急出動件数と総所要時間をかけた救急隊の総活動時間が、過去最高を更新しました。

（図 10・11）

一方、心肺停止した患者が 1 ヶ月後に生存している割合を示す救命率は向上しつつあり、救急業務の高度化のみならず、市民救命士の育成など「救命のリレー」の充実を図ってきた効果によるものと考えられます。

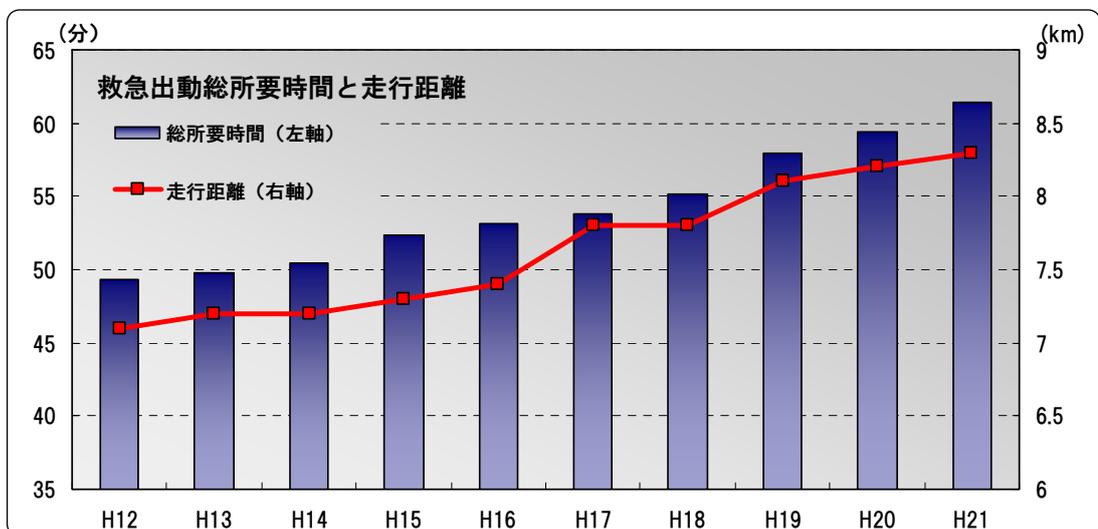
図 9 【救命率の推移】○救命率は順調に向上



神戸市消防局統計書より作成

図 10 【救急出動 1 件あたりの総所要時間（出動～帰庁）】

：救急医療体制の整備状況及び救急業務の高度化などにより増加傾向

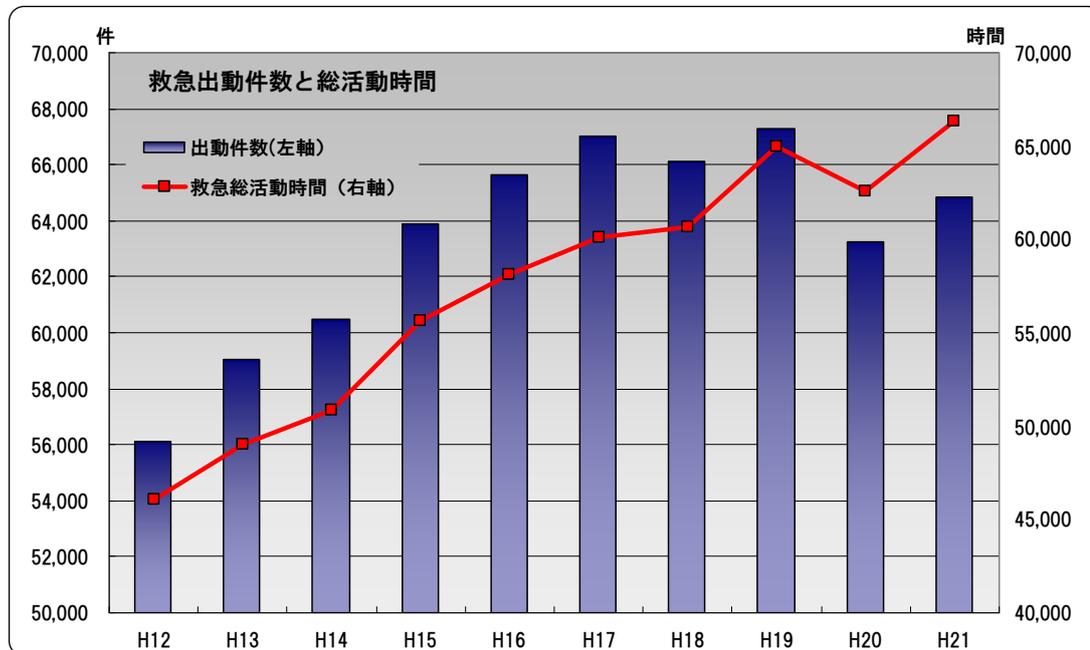


神戸市消防局統計書より作成

図11 【救急出動件数と総活動時間（平成12～21年）】

○平成21年中、救急隊の総活動時間は過去最高を更新

※全救急隊の総活動時間【時間】＝救急出動件数×1件あたりの総所要時間（出動～帰庁）



神戸市消防局統計書より作成

2025年に向けた課題

以上のような状況から、今後も質と量の両面から救急需要はさらに増大していくものと思われます。行政は人口減少・超高齢化社会の到来、高齢者の単身世帯の増加など、救急需要をとりまく様々な状況の変化を慎重に見守りつつ、救急車の適正配置や救急救命士の処置拡大などの対応を行っていく必要があります。

また、救命率の向上を図るためには、救急車が到着するまでの間における市民や事業者などの協力は欠かせません。行政だけでなく市民による応急手当の普及を促進していくなど、更なる「救命のリレー」の充実を図っていく必要があります。

いずれにしましても、正しい救急の知識を持つことは救急要請の抑制や事故発生未然防止につながります。「予防救急」を推進するなど、市民への普及啓発を継続していくことが重要となります。

4 阪神・淡路大震災から30年後の社会に向けて

現在の状況

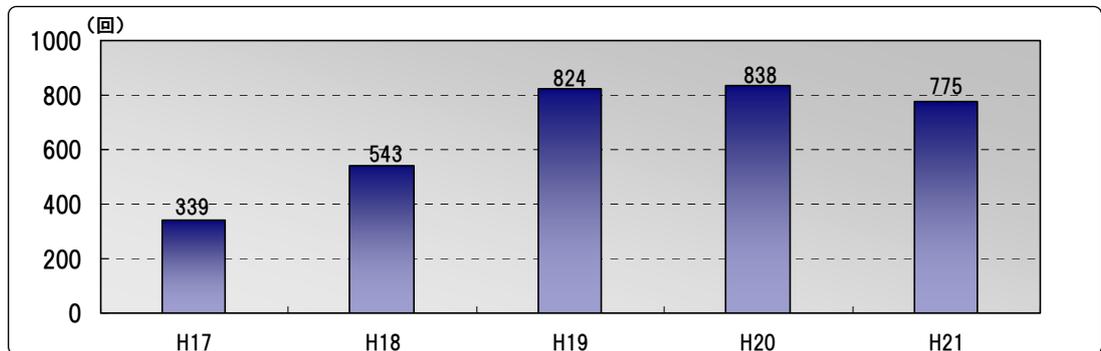
私たちから大事なものを奪い去った阪神・淡路大震災は、同時に、多くのことを教えました。“助け合うことの大切さ”、“備えることの重要性”、また、多くの支援を受けたことに対する感謝の気持ちや恩返し…、このようなことを市民・事業者・行政による様々な体制づくりや、国内外への発信などに取り組んできました。

神戸市内では、震災を教訓として誕生した「防災福祉コミュニティ」が市内全域191地区に結成済みで、防災訓練や救急講習会、防災リーダー研修など、毎年合わせて700回以上実施されています。(図12)

また、“防災ジュニアチーム”の結成や、小学校での防災教育支援など、地域における子ども達への防災の取り組みに対して、消防署、消防団などと共に、防災福祉コミュニティがその重要な一翼を担っています。



図12 【(参考) 防災福祉コミュニティ訓練回数の推移 (全市合計)】



神戸市消防局統計書より作成

その他にも震災教訓を伝える事業として、あらゆる世代に対する防災教育支援を行っており、例えば神戸市では、防災訓練の手引書や防災教育支援ガイドブックの作成、市民防災リーダーの育成など防災福祉コミュニティへの支援を始め、国内外からの視察の受入れ、特にJICA(国際協力機構)からの海外研修員の受入れなどを実施し、神戸の体験などを伝える取り組みを行ってきました。



防災教育支援ガイドブック



海外研修員の受入れ

2025年に向けた課題

震災から、すでに15年以上が経過しています。

地域によっては、防災訓練などへの参加者が減少・固定化しており、中心的に活動してこられた防災福祉コミュニティ役員の方々の高齢化も進んできています。

今後、震災を知らない世代はますます増えていきます。計画目標年次（2025年）には、30歳以下の人たちはすべて震災を知らない世代となります。

私たち神戸市民は、震災から得た貴重な教訓、「自助」「共助」の精神を決して忘れることなく、子ども達など、将来の新たな防災の担い手とともに「神戸からの発信」として次世代に伝え、取り組んでいかなければなりません。

また、神戸での震災以降のさまざまな教訓や取り組みについて、これを国内外に発信し、他都市での減災への取り組みに少しでも貢献できれば、震災時に支援を受けた神戸として、これ以上の喜びはありません。

以上のようなことから、引き続き「防災福祉コミュニティ」を始めとした地域や事業所による自主防災への取り組みを推進すると共に、子ども達への防災教育を含めた震災教訓の伝承、さらにはこれら取り組みを積極的に発信していくことが必要であると考えます。



5 「港都こうべ」の守り

現在の状況



「大輪田の泊」と呼ばれていた古くから、人・物・情報が行き交ってきた歴史ある港まち神戸、そして未来に向け、新たな交流が期待される神戸空港の開港。

神戸は、山や海に囲まれた自然豊かなまちであるとともに、二つの港を玄関とする、魅力ある交流の「港都」です。

人・物・情報の交流拠点として、さまざまな人が行き交い、多種多様な物が集積する神戸のまちは、安全面でも十分な対策が必要です。

今までにも、港の守りとして水上消防署や消防艇の配備などを進めてきました。また、神戸空港開港時には、航空機災害時の行動計画や航空機事故救助マニュアルなどの策定、空港管理事務所や空港消防署との連携強化、空港訓練への参加などを行ってきました。さらに、水上消防署には大規模災害や化学災害などに対応するため、消防艇を含む特殊部隊（本部特殊災害隊、特別高度救助隊、大規模災害対応救急隊）を集結させ、合同訓練など、連携した取り組みを行ってきました。

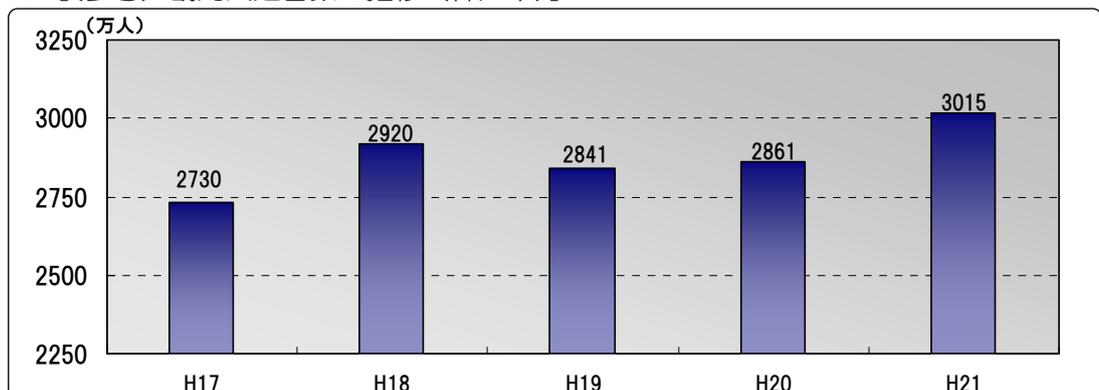


2025年に向けた課題

人・物・情報が交流する魅力あるまちとして「こうべ」がさらに発展していくためには、このような“みなと”の安全・安心を図っていくのはもちろん、市内各地へと広がる物流拠点や、人が多く集まる場所などに対する災害対応の充実を図られる必要があります。

さらに、人が交流する賑わいのあるまち神戸として、このような安全面での対策を積極的に展開、アピールすることができれば、旅行客やビジネス客など国内外から安心して神戸に来ていただき、多くの方が訪れる賑わいのあるまちとして神戸の活性化にも繋がることを期待されます。（図13）

図13 【(参考) 観光入込客数の推移 (神戸市)】



神戸市 HP より作成

神戸市としては今後、世界に誇れる安全・安心都市として、神戸に住み、働く方々の安全・安心はもちろんのこと、神戸を訪れる観光客やビジネス客に対しても安全・安心を提供できるよう、まち全体の安全・安心の向上に取り組んでいく必要があると考えます。

また、そのために必要な消防艇やヘリコプターを含む、“陸・海・空”の適切な部隊配置を進めると共に、安全・安心への取り組みを発信するための広報体制の充実・強化を図っていく必要があると考えます。



神戸消防の誕生とこれから…

消防基本計画策定にあたって、神戸市消防局の発足当時を振り返ってみました。

◆ 産声をあげた神戸消防 発足15年間の主な出来事 ◆

昭和23年	3月	自治体消防制度発足 神戸市消防局発足（庶務・技術・予防・消防課、 東・生田・兵庫・長田・須磨・垂水消防署）
		<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>湊川公園での消防局発足式典</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>当時の最新鋭車両(KS型消防車)</p> </div> </div>
	8月	生田消防署内に消防訓練所（消防学校の前身）設置
昭和24年	3月	広報誌『雪』の前身『神戸消防』創刊
	4月	神戸市初の救急車配置（兵庫）
昭和25年	5月	消防艇「(初代)たちばな」浸水
	12月	消防無線設備設置
昭和27年	10月	東灘消防署開設・東消防署を灘消防署と改称
	11月	消防職員同好会音楽部（音楽隊の前身）発足
	12月	神戸市初のはしご車配置（生田）
昭和32年	7月	生田消防署に水上分署を開設
昭和33年	6月	兵庫区荒田町に消防学校開校
昭和34年	5月	水上分署を消防署に昇格
昭和35年	6月	消防艇「(二代目)たちばな」進水
昭和36年	8月	消防力の基準制定
昭和37年	10月	消防機動隊設置
昭和38年	4月	救急業務の法制化



ポンプ操法競技会(昭和30年代)

◆ これからの神戸消防… ◆

昭和23年の発足以来、先人のたゆまぬ努力により、神戸市消防局は現在の姿に発展を遂げてきました。経験豊富な団塊世代の職員の大量退職などにより、知識や技術の伝承などが社会的な課題となっていますが、これまでに培ったものを絶やすことなく、これからの15年間、より安全で安心な“こうべ”の礎となる“神戸消防”として、引き継いでいかなければならないと考えています。

第3章 「グランドデザイン」

1 安全・安心都市“こうべ”の実現に向けて

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災は、今でも昨日の
ことのように思い返される本当に悲しい出来事でした。

あの当時、家の下敷きになった方を市民のみなさんが角材やジャッキを持ち寄り、あ
るいは素手で、長時間かけて掘り起こし救助にあたりました。また、けが人の方を、担
架代わりの蒲団に乗せ、協力しあって病院まで運びました。火災現場では、バケツやゴ
ミ箱など、水が入るものならなんでも持ち寄って消火にあたりました。

いずれも市内のそこかしこで見られた風景です。誰もが必死になって地震に立ち向か
いました。しかしながら、それでも助けることのできなかった多くの命があったことを、
私たちは決して忘れることはありません。

この年は「ボランティア元年」と呼ばれ、国内外から多数のボランティアやNPOな
どが支援に訪れ、助け合うことや絆、
命の大切さ、ありがたさ、といったも
のを心から実感することにもなりました。

震災から16年が経過した現在でも、
助け合いの精神や絆といったものは決
して色褪せることなく、むしろ社会全
体の高齢化や単身世帯の増加などを背
景に、ますます重要視されています。



今回、「神戸消防グランドデザイン2025」を策定するにあたり、計画目標年次に向
け、この震災を教訓とした「ひと」との繋がりや「きずな」の大切さといったものを次
世代に伝え、神戸の「まち」の安全・安心を構築することで、「神戸に暮らしたい、働
きたい、訪れたい」、といった魅力ある神戸を目指します。

また、同じく2025年に向けた「神戸市基本計画（神戸づくりの指針）」では、まち
が持つ魅力や資源、協働と参画による震災復興の取り組みなどを活かし、「デザイン」
の視点で磨きをかけ、神戸を活性化させる「創造都市（デザイン都市）」の実現をめざし
ています。

消防局においても、防災に対する「仕組みづくり」や「人づくり」、「物づくり」など
を、“グランドデザイン（消防基本計画）”として描いていき、神戸らしさとして次世代
に繋いでいきます。

デザインってなに？ *What is the Design?*

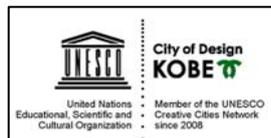
◆物事の「仕組みづくり」も“デザイン”◆

“デザイン”と聞くと、目に見える物や形の設計や意匠、造形などをすぐにイメージしますが、それ以外にも、目に見えないシステムや仕組みづくりの企画なども含めた、幅広い意味を持つ言葉です。

◆デザイン都市・神戸◆

神戸市では、優れたデザインを通じて、「美しさや楽しさ、やさしさや快適さなど、さまざまな要素との調和を重視し、新たな魅力を創り出すこと」によって、デザインという視点で“神戸らしさ”を見つめなおすことにより、新たな魅力と活力を創り出し、くらしの豊かさを創造するための中長期的な方針を定め、「デザイン都市・神戸」としてその取り組みを国内外に発信しています。

また、2008年にはユネスコ（国際連合教育科学文化機構）から、“創造都市ネットワーク”のデザイン分野としての認定を受けました。



ユネスコ「デザイン都市・神戸」ロゴマーク

◆「防災」とデザイン◆

これまでも神戸市では、防災での「仕組みづくり」や「物づくり」など、「神戸初」の取り組みを実施してきました。

例えば、仕組みづくりとして「防災福祉コミュニティ」や「まちかど救急ステーション」制度の創設、物づくりとしては、全国で最初に救急車の「ピーポーサイレン」の実装試験を行うなど、先進的な取り組みが神戸には多数あります。

今後、消防局では、このような“神戸発”の安全・安心への取り組みを“グランドデザイン（消防基本計画）”として計画し、防災での「仕組みづくり」や「人づくり」、「物づくり」、「事づくり」に繋げていくことで、神戸のまちの安全・安心を構築していきたいと考えています。

基本理念

「ひと」・「まち」・「きずな」で安全安心都市こうべを築きます

基本方針
(3)

- すべての「ひと」が日頃から防災について考え、取り組みます
- 安心して暮らし集える、安全な「まち」こうべをつくります
- 人間としての「きずな」を大切に、みんなが共に助け合います

2025年こうべ 安全で安心なまちの将来像(5)

将来像1 みんなで安全安心に取り組むまち

- ①ゆるやかな連携による助け合いで、地域の高齢者や障がい者など、皆で支え合うまちを目指します
- ②家庭での安全安心を進めるため、住宅火災の被害軽減や予防救急などに取り組みます
- ③地域の安全のため、事業所の自主防災体制の充実を図り、地域との連携を支援します

将来像2 防災への心を育むまち

- ④世代を超えた防災教育の充実を図り、震災文化を後世に伝えます
- ⑤普段から防災に関心を持ってもらうため、市民に役立つ防災情報の発信を進めます
- ⑥防災のプロである消防職団員への研修・訓練を充実させると共に、市民に開かれた消防署・消防団を目指します

将来像3 命を大切に考え取り組むまち

- ⑦応急手当の普及などを地域と共に推進し、命を救う「救命のリレー」を充実させます
- ⑧救急の更なる高度化を図り、助かる命を救うため、救命率の向上を目指します
- ⑨救急需要対策を進めると共に、適切な救急車の配置などを進め、救急サービスの向上を目指します

将来像4 消防サービスが行き届くまち

- ⑩誰もが等しく消防サービスを受けられるよう、消防需要に応じた消防署所や車両の配置等を進めます
- ⑪ICT技術などの積極的な活用を図り、市民サービスの向上を目指します
- ⑫社会情勢の変化に柔軟に対応できる消防の組織づくり、体制づくりを目指します

将来像5 あらゆる災害に備えるまち

- ⑬地震等大規模災害に対応するため、広域応援体制や、大学・研究機関などとの連携を深めます
- ⑭複雑多様化する建築物などの安全性確保のため、ハードソフト両面で必要な対策を進めます
- ⑮国内外での火災や災害事例などを分析評価し、現場活動などに還元することで減災に繋がります

共通取組方針(2)

plus チルドレン

子ども達を災害から守ると共に、将来の神戸を担う人材を育てます

plus ホスピタリティ

すべての人へ“防災”を通じた“おもてなし”に繋がります

「ひと」、「まち」、「きずな」で安全安心都市こうべを築きます

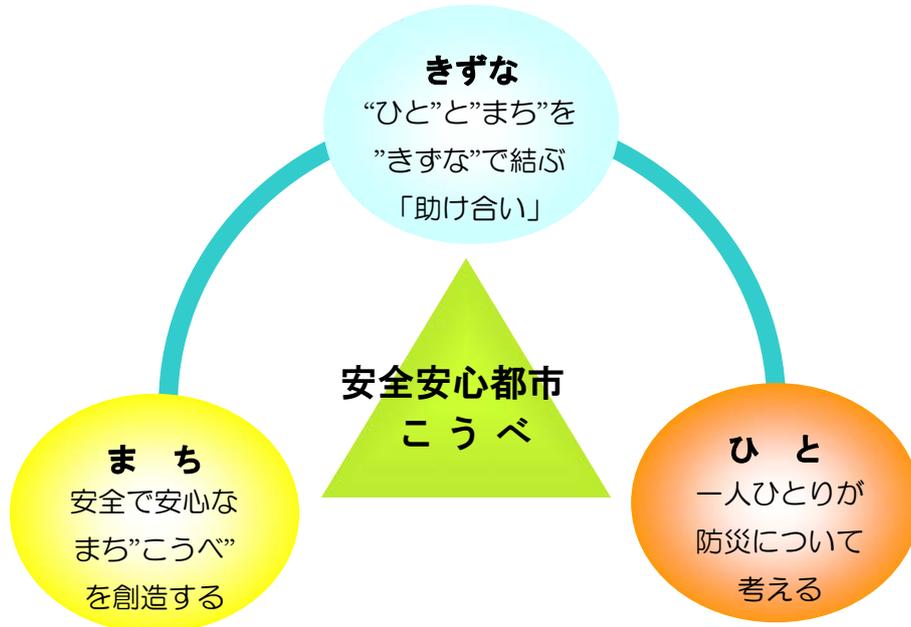


図14【2025年安全安心都市“こうべ”の実現に向けた取り組みの概念図】

神戸市消防局では、2025年に向けた「基本理念」として、“ひと”と“まち”を“きずな”で結び、震災を教訓とした「自助」「共助」「公助」の取り組みを引き続き推進していき、安全で安心な都市こうべを築いていくことを「ひと・まち・きずなで安全安心都市こうべを築きます」として基本理念に掲げました。

本計画では、この「基本理念」の下、安全安心都市こうべの実現のため、取り組みの「基本方針」と「2025年神戸のまちの将来像」を示すことで、将来に向けた取り組みの方向性を明らかにしています。(図14・15)

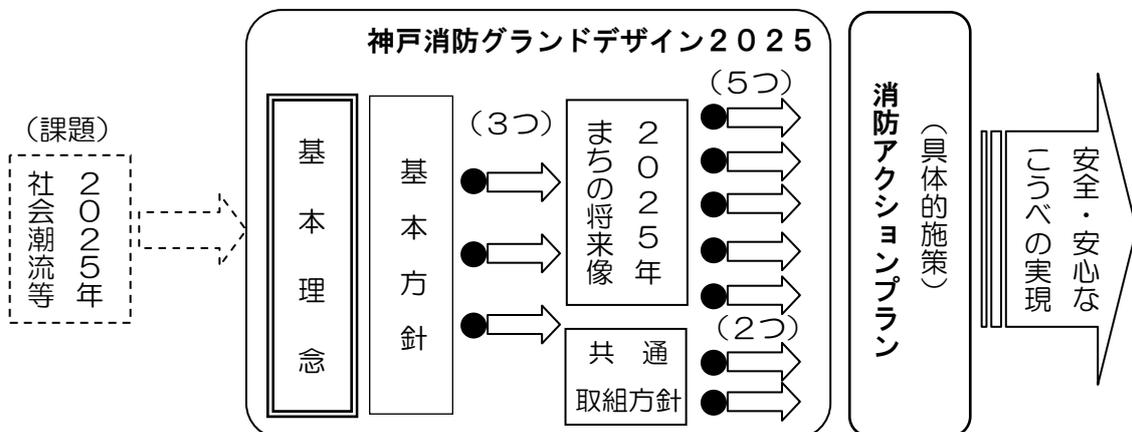


図15【将来に向けた具体的な取り組み方策】

3 3つの「基本方針」

2025年に向けた「神戸消防グランドデザイン2025」を策定するにあたっては、市の基本計画である「神戸づくりの指針」と連携、相互補完しながら一体的に取り組んでいくよう進めていきます。

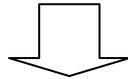
そのために、「神戸づくりの指針」で示された取り組みをベースに、将来の「神戸の安全・安心」に対して取り組むべき方向性を、消防基本計画の基本方針として決めました。

「神戸づくりの指針」では「市民」「地域」「広域」の3つの視点で、将来に向けた取り組みの方向性を明らかにしています。

【神戸づくりの指針】

取り組みの方向性：3つの視点「市民」「地域」「広域」

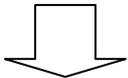
「市民」・市民一人ひとりが能力を発揮するまち
「地域」・人と人のつながりを活かし地域が主体となるまち
「広域」・新たな価値を創造し世界に発信するまち



「神戸消防グランドデザイン2025」では、この3つの視点を受け、市民一人ひとりが防災意識を高め取り組む（＝「ひと」と共に、地域みんなで助け合い（＝「きずな」）、さらには神戸市全体として、すべての人が安全で安心して暮らし、訪れることができるまちづくり（＝「まち」）をめざす方向性として「基本理念」、そしてそれを受けた「基本方針」として決めました。

【神戸市消防局取り組み指針】

基本理念：『ひと』・『まち』・『きずな』で安全安心都市こうべを築きます



基本方針

- ・すべての「ひと」が日頃から防災について考え、取り組みます
- ・安心して暮らし集える、安全な「まち」こうべをつくります
- ・人間としての「きずな」を大切に、みんなが共に助け合います

＜基本方針1＞すべての「ひと」が日頃から防災について考え、取り組みます

「あのときのような被害は二度と経験したくない……。」神戸市民なら誰もが願う、阪神・淡路大震災に対する思いでしょう。

現在も、震災で犠牲になられた方々を想いながら、心から地域の安全を願い、「尊厳」を持って活動されている防災への取り組みや、防災活動にご尽力されている方々の“地域のため、自分たちがまちを守る”という「誇り」、このようなものを、子ども達を含む地域のすべての人が共有し、これから起こりうる災害に備え、自分自身そして家族の命を守るため、市民一人ひとりが今一度考え、取り組むことが必要です。

震災から15年が経過し、震災自体を経験していない市民が増加し、また、本計画の目標年次である2025年には、30歳以下のすべての市民が震災を経験していない世代となり、今後、ますます震災教訓の伝承は困難となっていきます。

「災害は忘れた頃にやってくる」……だからこそ今、震災教訓の原点に立ち返り、“災害に備えること”の重要性を、再度、訴えていく必要があると考えます。

一人の力ですべての物事に取り組むことは容易ではありませんが、多くの方々が同じ方向性を持って踏み出すことができれば、それが安全・安心に対して、被害を軽減する取り組みへの第一歩となります。

消防局では、「備えることの大切さ」を伝え、市民一人ひとりが日頃から防災について関心を持ってもらうため、地域や事業所の方々、消防団などと協働しながら、必要となる取り組みを進めていきたいと考えます。

「あのときのような被害を二度と経験しない」ために・。



〈基本方針2〉安心して暮らし集える、安全な「まち」こうべをつくります

“安全”への欲求は、人間の基本的欲求の中でも食欲など生理的欲求に次ぐ、生きていく上で必要な優先度が高いものであると、アメリカの心理学者マズローは定義しています。

そういう意味でも、安全・安心は、安寧で幸せな生活を送る上で基礎となるものであり、誰もが有する当然の権利ともいえるでしょう。

神戸のまちの安全・安心のため、消防局では、市民や事業所、消防団などと協働しながら、これまでもさまざまな取り組みを行ってきました。

これからも、このような市民等との協働と参画の取り組みを引き続き推進していくと共に、災害の多様化や複雑化などにも対応できる消防力を整備していく必要があります。

今後とも、あらゆる災害に対応するため、消防や救急体制の充実・強化を図り、神戸に暮らし、働く人たちの安全・安心の確保に努めていきます。

また、神戸市には、年間3,000万人を超える観光客が訪れています。(平成21年度観光入込客数)また、観光だけでなく企業誘致やコンベンション誘致、イベントの開催など、海外からも含めて、数多くの方が神戸を訪れています。

神戸のまちを考えたとき、震災教訓を始めとした地域や事業所の皆さんとの協働による防災への取り組みや、“神戸発”の安全への取り組みといったものは、神戸を訪れる方々に“神戸らしさ”として安全安心をアピールする、市の特色を活かした優れた事例といえます。

また、併せて観光地や宿泊施設などの安全を高めることで、誰もが安心して訪れることができるまち“こうべ”を実現し、これらを発信することで、結果として多くの方々に神戸を訪れてもらい、まちの活性に繋がるよう「防災を通じたおもてなし(=安全・安心ホスピタリティ)」の観点から、神戸市の安全・安心に取り組んでいきます。

さらには、デザイン的な視点からも、安全なまちへの取り組みの“仕組みづくり”や“事づくり”“物づくり”などにも繋げていきます。



＜基本方針3＞人間としての「きずな」を大切に、みんなが共に助け合います

阪神・淡路大震災を受けて、我々は助け合いや支え合いにより、今日まで復興の歩みを進めてきました。

また、これからさらに少子超高齢化が進み、高齢者単身世帯も増加する傾向にあることなどから、将来、地域での助け合いが今後ますます重要となってきます。

神戸では、震災を教訓に、大災害時に自主的な防災活動を行う組織として、“防災”と“福祉”が融合した、神戸独自の「防災福祉コミュニティ」が誕生し、現在、小学校区を基本に市内の全191地区で結成されています。

地域の皆さんにより、毎年700件を超える防災訓練や救急講習、防災講演会など、現在も市内各地で実施されていますが、今後はこのような防災活動の充実に加え、日頃からの”助け合い”に繋がるような福祉的な活動を充実、強化する取り組みを実施、支援していきます。

かのアリストテレスは、「人は社会的な動物である」と定義しました。

人は一人で生きているのではなく、家庭なり地域なり何らかの形で他の人と“きずな”を形成し、また数多くの役割を持って生きています。

震災時に培った“人と人との繋がり”や“きずな”をといたもの（ソーシャルキャピタル）を、将来への安全・安心の取り組みへと繋げていくため神戸市では、地域のみんなで支え合い、助け合えるような土壌の形成や、“人財”の育成を図っていきます。

“助け合うこと”の大切さを実感した神戸市として、震災という逆境をバネに、誰もが暮らしたい、働きたいといったまちを目指して、取り組みを進めていきます。



4 5つの「安全で安心な神戸のまちの将来像」

第2章で述べた神戸を取り巻く社会潮流と課題、それに対する神戸消防としての基本理念と基本方針、そして、それらを実現させるため、神戸の安全・安心の将来像として5つのまちの姿を描いています。

いずれも、2025年に向けた取り組みの柱となるもので、この安全・安心なまちの実現のため、今後、この将来像を基に具体的な施策等（アクションプラン）を作成していきます。

2025年 安全で安心な神戸のまちの将来像

- ・ みんなで安全安心に取り組むまち
- ・ 防災への心を育むまち
- ・ 命を大切に考え取り組むまち
- ・ 消防サービスが行き届くまち
- ・ あらゆる災害に備えるまち

<将来像1> みんなで安全安心に取り組むまち

イメージ写真挿入

市民みんなで防災について考え、災害の軽減を図っていくことは、震災を教訓として助け合うことの重要性、備えることの大切さなどを実感し、地域と共に取り組んできた「神戸」として、後世に伝えていかなければならない大切な「共助」の精神です。

地域や事業所、大学やNPOなど、防災に携わる方々によるゆるやかな連携により、行政との協働と参画の下、共に取り組み携わることで、将来の地域の安全・安心に対応していけるまちを目指します。

＜将来像2＞防災への心を育むまち

イメージ写真挿入

みんなで防災に携わるためには、普段から地域のつながりを大切にしつつ、防災にも関心を持ってもらう必要があります。

また、震災の経験や教訓を風化させることなく、後世に伝えていくことも重要です。

このようなことから、子ども達への防災教育を、地域の方々と共に支援することで、世代を超えた防災への取り組みに繋げていきます。

さらに、普段から防災に関心を持ってもらうため、防災に役立つ情報の発信を積極的に実施すると共に、開かれた消防署・消防団を目指していきます。

消防職員や消防団員については、研修や訓練体制の充実・強化を図り、防災のプロとして市民の安全安心を守ります。

＜将来像3＞命を大切に考え取り組むまち

イメージ写真挿入

本格的な少子高齢化社会の到来や、単身世帯の増加など、今後の救急需要はますます高まることが予測されます。

このような中、助かる命を救うため、市民一人ひとりが救急に対する意識を高め、応急手当の普及などによって「救命のリレー」が充実していくことが重要です。

今後とも、市民や事業所との協働の取り組みを推進していくと共に、消防局では必要となる救急車の適正な配置や救急の高度化を進め、一人でも多くの方が助かるよう、救急サービスの向上を目指していきます。

＜将来像4＞消防サービスが行き届くまち

イメージ写真挿入

災害に強いまちづくりを進める上で、都市の防災基盤を整備することは、あらゆる災害への取り組みのベースになるものです。消防局では、必要な消防署所の整備や資機材の整備、消防車両の適正な部隊配置などを行い、市民の安全を守ります。

また、ICT技術など将来の技術革新を視野に、これらの積極的な活用を図ることで、市民サービスの向上を目指していきます。

さらに消防サービスが、神戸に住み、働き、訪れる方すべてに滞りなく行き届くよう、社会情勢の変化にも柔軟に対応できる消防体制や組織づくりを目指していきます。

＜将来像5＞あらゆる災害に備えるまち

イメージ写真挿入

地震を始めとした大規模災害に対応していくため、応援体制の充実など広域応援体制の強化を進めていくと共に、大学や研究機関など、各分野の専門家との連携を深め、市民などとも協働しながら、あらゆる災害への対応強化に努めていきます。

また、今後ますます複雑化、多様化、高度化することが予測される、建築物などに対する安全の確保について、必要な対策をハード、ソフト両面で進めていく必要があります。

さらに、過去に起こった火災や災害、他都市や諸外国などでの事例などを収集、分析、評価し、その結果を現場への活動などに還元することで、“減災”への取り組みに繋げていきます。

5 2つの「共通取組方針」

5つの神戸の将来像を描くにあたって、「神戸らしさ」や「独自性」を打ち出し、神戸の安全・安心への取り組みを内外へ発信すると共に、将来の神戸の安全・安心への「仕組みづくり」や「人づくり」に繋げていくことで、2025年に向けた神戸の防災への取り組みの方向性を明らかにしていきます。

そのために本計画では、神戸の将来像実現に向けた取り組みに対して「plus（プラス）」して実施する2つの共通取組方針を新たに挙げました。

今後、これらを神戸らしい安全・安心への取り組みとして、すべてのまちの将来像を描く上で「プラス」の視点で実施していきます。

＜共通取組方針1＞plus チルドレン

子ども達を災害や事故から守ること、それには日頃から大人が社会全体の中で見守っていく必要があります。

本計画を推進するにあたり、あらゆる施策で“子どもを守る”視点で取り組んでいくことで、今後より一層、子ども達の安全・安心が図られるものと考えます。

また、命の大切さを伝え、子ども達に生きる力を養う“防災教育”についても、震災の教訓の伝承を始めとした防災教育を展開し、子ども達が大人になった時、地域の防災活動にも積極的に関与し、ひいては地域防災力の向上に繋がるよう、消防局として積極的に支援していきます。

このようなことから、今後、神戸の将来像を描く上で、すべての取り組みについて「+子ども」の視点で取り組んでいくことで、子ども達の安全・安心を図ると同時に、さまざまな“体験”を通じた防災教育等により、将来防災福祉コミュニティを始めとした地域の防災活動にも参加してもらえよう、地域や事業所、消防団等の協力の下、積極的に取り組んでいきます。



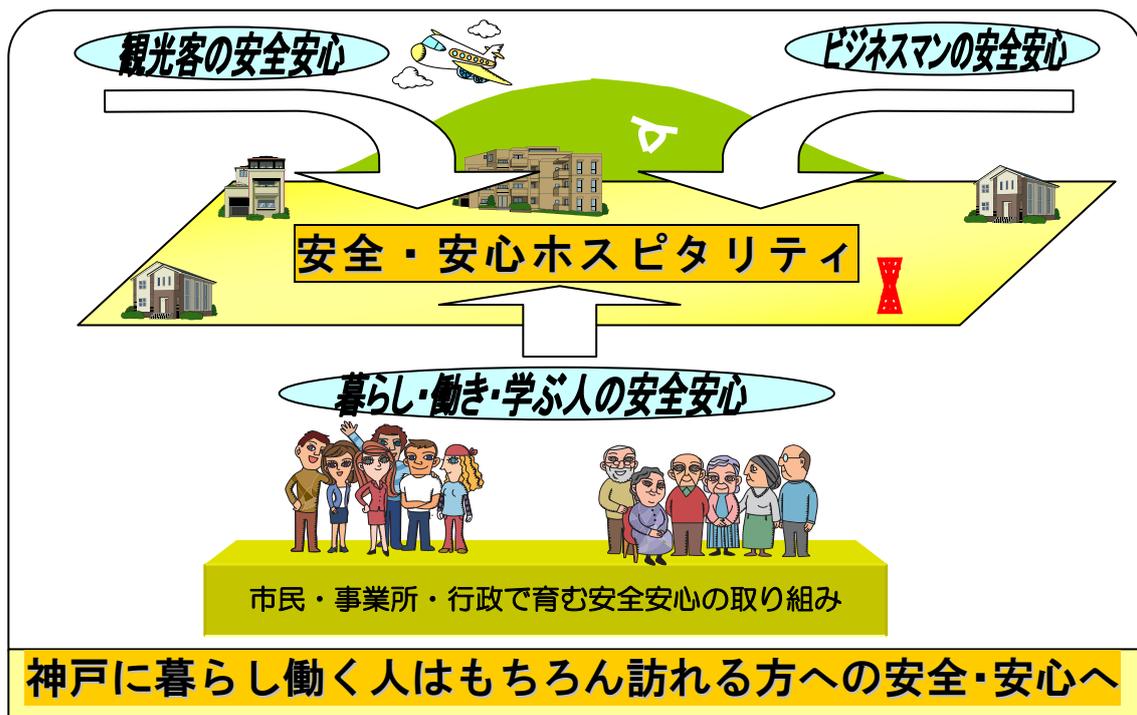
＜共通取組方針2＞plus ホスピタリティ

「神戸らしさ」や「神戸からの発信」を考えたとき、震災という逆境をバネに、復興の歩を進めてきたこれまでの安全・安心への取り組みは、他都市にはない神戸の大きな特色といえます。

このような特色を積極的に発信し、いわば“防災のおもてなし”（＝安全・安心ホスピタリティ）として、神戸市の安全・安心を広く他都市などへ発信していくことで多くの人が訪れ、まちの賑わいや活性化に繋がります。

また、震災で学んだ“支え合い”や“助け合い”の大切さといったものを、同じように“防災でのおもてなし”をとらえて市民に発信し、今一度原点に立ち返って取り組むことで、これからの超高齢化社会などにも対応していきたいと考えます。（図16）

消防局では、5つのまちの将来像を描く上で、この“ホスピタリティ”の視点で取り組みを推進し、神戸に暮らし働く人はもちろん、訪れる方も含めた、市全体の安全・安心を高めていきます。



観光地や宿泊施設、集客施設、外国人など観光客に対する安全・安心



図16【安全・安心ホスピタリティの概念図】

第4章 具体的取組施策「消防アクションプラン」

第3章で描いた「2025年こうべ 安全で安心なまちの将来像」の実現に向けては、その具体的施策について「消防アクションプラン」で計画し、その実現を目指します。

1 具体的取組施策

【第2部】消防アクションプラン（別紙）は、2025年までの基本方針やまちの将来像を明らかにした、【第1部】「神戸消防グランドデザイン2025」に基づき、5年ごとの具体的な取組施策などについて定めています。

具体的事業等の詳細は別紙「消防アクションプラン」を参照してください。

【第2部】消防アクションプラン 2011-2015 の構成

第1章 「2025年 神戸のまちの将来像」実現に向けた重点施策

【5つのまちの将来像】

1. 「みんなで安全安心に取り組むまち」

・地域のゆるやかな連携 ・家庭での安全安心 ・事業所の自主防災体制

※それぞれに具体的事業を計画する（以下同じ）

2. 「防災への心を育むまち」

・防災教育の充実 ・防災情報の発信 ・研修、訓練の充実

3. 「命を大切に考え取り組むまち」

・救命のリレー ・救急業務のさらなる高度化 ・適正な救急車の配置

4. 「消防サービスが行き届くまち」

・消防署所、車両の配置 ・ICT技術の活用 ・組織、体制づくり

5. 「あらゆる災害に備えるまち」

・大規模災害等への対応 ・多様化する現場活動への対応 ・災害事例の分析評価

第2章 「共通取組方針」に関連する取組

【2つの共通取組方針】

1. 「plus チルドレン」

※それぞれに具体的事業を計画する

2. 「plus ホスピラリティ」

〃

第3章 「アクションプラン 2011-2015」の検証・評価

検証評価シートの作成～シートに基づき「将来像」ごとに検証・評価を行う

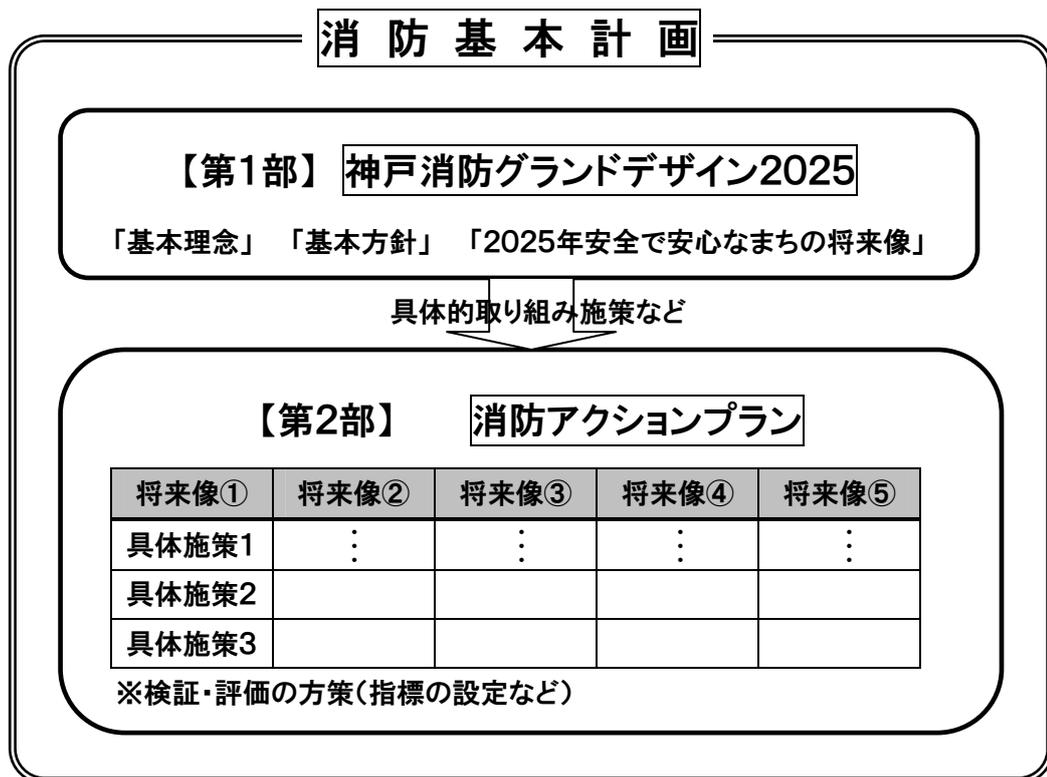
2 消防アクションプラン2011-2015（前期）

前期として、計画年次2011-2015年度の「消防アクションプラン2011-2015」を策定し、今後5年間の具体的な重点施策、具体的事業について計画します。

アクションプランでは、グランドデザイン（15ヵ年計画）で明らかにした2025年に向けた社会潮流など5つの視点（課題）について、今後5年間の、より具体的な課題について検討すると共に、「2010消防基本計画」などで取り組んできた主な成果と、残された課題についても明らかにし、今後継続して取り組むべきものについても計画に盛り込んでいくこととしています。

計画では、5つのまちの将来像ごとに取り組むべき具体的施策を計画し、さらに、計画された具体的施策については、前述したPDCAサイクルによる検証・評価などについても定めていきます。（図17）

図17 【計画の具体的な進め方】



3 消防アクションプラン（中期・後期）

前期（2011-2015）計画の目標年次終了後には、中期（～2020年度）、後期（～2025年度）と、それぞれ5ヶ年での消防アクションプランを策定し、その時々
の社会潮流などを背景とした、時流に沿った計画策定を行っていく予定です。

4 計画実現に向けて

計画実現に向けて、アクションプランで計画された具体的施策について、毎年の進捗管理を実施すると共に、まちの将来像ごとに指標を設定し、その取り組みを評価・見直し、実現に向けて取り組んでいきます。

このように本計画は、安全で安心なまちの将来像実現のため、神戸消防グランドデザイン2025（15ヵ年計画）と、消防アクションプラン（5ヵ年計画）の二つから構成することで、神戸市基本計画～神戸づくりの指針（15ヵ年）・重点施策計画（5ヵ年）と同じ計画目標年次として、連携補完しながら計画を進めていくと共に、5ヵ年ごとの計画の見直しなどを含め、時代に柔軟に対応できる計画構成としています。

5 未来に繋がる、未来へ繋げる

今回の計画策定にあたり、本文中には子ども達の描いた消防に関する絵を掲載させてもらいました。

この子供たちが大人になる頃、神戸のまちはどのような姿になっているのでしょうか。

15年後、本計画での取り組みが推進され、まちの安全・安心に携わったすべての人たちの思いが未来の神戸の安全・安心に繋がり、誰もが安心して暮らし、働き、そして訪れるまち「神戸」として発展していることを願ってやみません。

2011年3月

消防基本計画策定経過

	次期消防基本計画検討会	庁内検討体制等
平成22年	6月22日 ◎第1回検討会開催 ↓ 議題 ○消防基本計画の策定 ○消防の業務、主な取り組み ○取り組みの方向性について(案) ○今後のスケジュールについて(案)	※幹事会開催(6月) ※職員意見募集の実施(6月～) ※各消防署局部長巡回の実施(7月)
	8月6日 ◎第2回検討会開催 ↓ 議題 ○第1回次期消防基本計画検討会議事要旨 ○次期消防基本計画(～2025年)骨子(案) ○計画実現に向けて(案)	※幹事会、検討部会開催(7月)
	11月12日 ◎第3回検討会開催 ↓ 議題 ○「消防グランドデザイン2025」の策定 ○「消防アクションプラン2011-2015」(案)の提示・審議 ○パブリックコメントについて ↓ パブリックコメントの実施(12月～1月)	※幹事会、検討部会開催(10月) ↓ 消防基本計画中間案の策定 ↓ (注: 議題と策定ボックス間の関係を示す破線矢印あり)
平成23年	1月〇〇日 ◎第4回検討会開催 ↓ 議題 ○パブリックコメントの結果 ○「消防基本計画」(案)の提示 ○今後の進捗管理(PDCA)について	※幹事会、検討部会開催(1月)
	3月 ◎消防基本計画策定	

消防基本計画検討会 委員名簿

※五十音順・敬称略

氏 名	所属等	役職等
宇 津 寛	神戸市自治会連絡協議会	会 長
○ 梶 木 典 子	神戸女子大学家政学部家政学科	准教授
坂 本 津留代	井吹台東防災福祉コミュニティ	会 長
桜 間 裕 章	株式会社 神戸新聞社	論説副委員長
杉 山 力 子	神戸市婦人団体協議会	副会長
中 神 一 人	神戸市医師会	副会長
永 松 伸 吾	関西大学社会安全学部	准教授
柰 木 和 明	神戸市消防協会	会 長
◎ 北 後 明 彦	神戸大学都市安全研究センター	教 授
保 井 剛太郎	三ツ星ベルト株式会社神戸本社	理 事

◎会長

10名

○副会長



【参考】「次期消防基本計画検討会」設置要綱

（目的）

第1条 神戸市の消防行政の指針となる次期の消防基本計画（以下「基本計画」という。）を策定するにあたり，専門的な見地及び市民の立場から幅広く意見を求めることを目的として，検討会を開催する。

（名称）

第2条 検討会の名称は，「次期消防基本計画検討会」（以下「検討会」という。）とする。

（委員）

第3条 検討会の委員は，広く消防行政に知見を有するものから消防局長が委嘱する。

（会長及び副会長）

第4条 検討会に，会長及び副会長を置く。

2 会長及び副会長は，委員の中から消防局長が指名する。

3 副会長は会長を補佐し，会長に事故があるときは，その職務にあたる。

（期間）

第5条 委員の任期は，平成23年3月31日までとする。ただし，消防局長が必要と認めた場合は，期間を延長することができる。

（招集）

第6条 検討会は消防局長が招集する。

2 消防局長が必要と認めるときは，委員でない者の出席を求め意見を聞くことができる。

（雑則）

第7条 この要綱に定めるもののほか，検討会の開催に関して必要な事項は，消防局長が定める。

附則

この要綱は，平成22年6月16日から施行する。

掲載させて頂いた絵の作者一覧（敬称略・学年は掲載当時）

※平成22年度防災啓発作品応募作の中から掲載しました

（ページ）	（名 前）	（学校名・学年）
P14	岡本しょうま	花山小学校 2年
P16	安福 琉馬	小東山小学校 5年
P23（左）	小坂 拓哉	長坂中学校 3年
P23（右）	古宮 葵	鶴台中学校 1年
P24	清水 哲彦	西山小学校 5年
P25（左）	正崎 敬之	西代中学校 2年
P25（右）	佐藤 仁貴	井吹西小学校 4年
P29	野田 陽太	東須磨小学校 2年
P33	持田 那乃	鶴甲小学校 2年

あなた方が大人になった時、神戸のまちが安全で安心なまちでありますように・・・

神戸市消防基本計画【神戸消防グランドデザイン2025】

発行年月日 平成2011年3月

編集・発行 神戸市消防局総務部庶務課

〒650-8570

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

神戸消防グランドデザイン2025

<p>基本理念</p>	<p>「ひと」・「まち」・「きずな」で安全安心都市をデザインする</p>
<p>基本方針(3)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての「ひと」が日頃から防災について考え、取り組みます ・安心して暮らし集える、安全な「まち」こうべをつくります ・人間としての「きずな」を大切に、みんなが共に助け合います
<p>2025年 神戸のまちの将来像(5)</p>	
<p>1 みんなで安全安心に取り組むまち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ①地域のゆるやかな連携 ・ゆるやかな連携による助け合いで、地域の高齢者や障がい者など、皆で支え合うまちを目指します ②家庭での安全安心 ・家庭での安全安心を進めるため、住宅火災の被害軽減や予防救急などに取り組みます ③事業所の自主防災体制 ・地域の安全のため、事業所の自主防災体制の充実を図り、地域との連携を支援します
<p>2 防災への心を育むまち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ④防災教育の充実 ・世代を超えた防災教育の充実を図り、震災文化を後世に伝えます ⑤防災情報の発信 ・普段から防災に関心を持ってもらうため、市民に役立つ防災情報の発信を進めます ⑥研修・訓練の充実 ・防災のプロである消防職団員の研修訓練を充実させると共に、市民に開かれた消防署・団を目指します
<p>3 命を大切に考え取り組むまち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ⑦救命のリレー ・応急手当の普及などを地域と共に推進し、命を救う「救命のリレー」を充実させます ⑧救急の更なる高度化 ・救急の更なる高度化を図り、助かる命を救うため、救命率の向上を目指します ⑨適正な救急車の配置 ・救急需要対策を進めると共に、適切な救急車の配置などを進め、救急サービスの向上を目指します
<p>4 消防サービスが行き届くまち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ⑩消防署所・車両の配置 ・誰もが等しく消防サービスを受けられるよう、消防需要に応じた消防署所や車両の配置等を進めます ⑪ICT技術の活用 ・ICT技術などの積極的な活用を図り、市民サービスの向上を目指します ⑫組織・体制づくり ・社会情勢の変化に柔軟に対応できる消防の組織づくり、体制づくりを目指します
<p>5 あらゆる災害に備えるまち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ⑬大規模災害への対応 ・地震等大規模災害に対応するため、広域応援体制や、大学・研究機関などとの連携を深めます ⑭多様化する現場活動への対応 ・複雑多様化する建築物などの安全性確保のため、ハードソフト両面で必要な対策を進めます ⑮災害事例の分析評価 ・国内外での火災や災害事例などを分析評価し、現場活動などに還元することで減災に繋がります
<p>共通取組方針(2)</p>	
<p><i>Plus</i> チルドレン～防災を通じた“子ども”の視点</p>	<p><i>Plus</i> ホスピタリティ～防災を通じた“おもてなし”の視点</p>